する事、慧林音義第十八翻譯名義集第七などに、花かんざしを、天竺ことばに、麼羅とは華鬘なりといひ、又釋迦如來叔母に示されたる大愛道比丘經にもみへたれば、花かんざしをさすは、三國古今の風也、

〔江家次第三正月〕踏歌

藏人催内侍以下泥繪唐衣、纐結裳、華釵、錦鞋等、

〔唐書二十四車服〕一品翟九等花釵九樹、二品翟八等花釵八樹、三品翟七等花釵七樹、四品翟六等花釵六樹、五品翟五等花釵五樹、寶鈿視花樹之數、

〔賤のをだ巻〕一衣服の色も、其比○寶曆は丁子茶と云色流行出て、○中略又子どもは花かんざしとて、美しく花を付たるかんざしをさせり、是は畢竟よし原の禿のあたまを眞似たるなり、其比の歌に、丁子茶と五寸もやうに日傘朱ぬりの櫛に花のかんざし、とて貴賤吟みたり、

〔浪花の風〕首飾の類も、江戸とは同じからず、○中略また女子供も、銀かんざしを用るは稀にして、多くは絹、又は紙抔にて、美しく作りし花簪など、下直の品を用るなり、これ中より以下の風俗なり、

〔歴世女裝考二〕裁細工の花かんざし　まげゆはひ　まへざし

裁あるひは紙細工の花かんざし、今もつはら用ふ、京製なるはすぐれて美工なれど、價は廉く樸にして雅なり、此物今より四五十年前、某の御館に仕へたる女中偶然つくりはじめけるに、徐々職人の作るやうになりしと、そのみたちにつかへたる老婦がいへり、

〔我衣〕元文、寛保ノ比ニハ、舞子、金銀ニテ梅ノ枝ニ色紙短冊ヲ付テサス、往來スレバ音ノスルヤウニコシラヘタリ、

〔守貞漫稿十女扮〕守貞○喜田川云、是近世花簪ノ初トモ、又中興トモ云ベシ、源氏若菜上四十賀ニ云、カザシノ臺ハ沈ノケソク、マガネノ鳥、銀ノ枝ニ居タル心ロバヘ云々、古ハ高貴ノミ用之、近世ハ